

シンポジウム

地球惑星科学の哲学

司会：青木滋之（会津大学）

提題：吉田茂生（九州大学）

渡邊誠一郎（名古屋大学）

熊澤峰夫（名古屋大学）

戸田山和久（名古屋大学）

シンポジウム要旨：

「地球惑星科学の哲学」という言葉を聞くと、「ああ、生物学の哲学といった個別科学の哲学の1つでしょ」と言われるかもしれない。しかし、このシンポジウムの趣旨はそうした従来の科学哲学とはかなり異なっていることを先に断っておきたい。このシンポジウムで話題となるのは、（生物学の哲学、心理学の哲学のような）地球惑星科学を〈対象〉とした哲学というよりも、むしろ、地球惑星科学が〈持っている〉哲学、言うなれば〈地球惑星科学者の〉哲学であるからである。そして、私たちが企図している「地球惑星科学の哲学」は、従来の科学哲学の域を大きく超え出たものであることが、本シンポジウム全体から徐々に読み取れるものと思う。

「地球惑星科学の哲学」の中身については、提題者から各々発表があるので、ここでは全体的見取り図を示しておく。まず司会の青木が、我々の研究グループ（新しい科学哲学をつくる会*）設立の経緯を説明する。会の設立は、2009年応用哲学会WS「都城科学哲学を評価する」のすぐ後に、地球惑星科学者（熊澤・吉田・渡邊）と科学哲学者（青木・戸田山）が小さな勉強会を始めたことがきっかけである。その後、この勉強会は「自然主義」を合言葉に定期的な研究会へと発展して現在にまで至っており、今年度から科研費基盤研究(B)「地球惑星科学の哲学の基盤構築」（代表：青木）が採択され、より組織的な研究へと乗り出している。

次に、地球科学の吉田から、「全地球史解読」プロジェクトについての説明が与えられる。これによって、地球惑星科学と科学哲学が密着連携することになる必然性が明らかになるだろう。全地球史解読は、地球上に知的生命が現れ、地球の歴史と摂理を探求し始めたというイベントを「地球史第七事件」として位置づけ、科学の発生そのものを地球惑星科学の研究対象として定めた。地球惑星科学は、地質学や地球物理学などだけでなく、宇宙科学を含めて、性格の異なる様々な科学諸分野との学問的総合の産物である。この総合化の成果として、生命の進化史、人類の進化、文明の変遷、はては科学の成立や発展までを、

~10⁹年に亘る一連の自然史の中に具体的に位置づけられる基盤が提供されることになった。

それでは、その地球惑星科学とはどのような学問であるか、どのような方法論により地球惑星の歴史を明らかにしようとするのか。これを明らかにするのが渡邊による提題である。地球惑星科学は、再現実験を原理的に受け付けない一度きりの歴史的な自然事象を、物理学や化学のような普遍科学を基盤に、観測とシミュレーションによって再構築していく、という点において普遍科学とも人文系の歴史科学とも異なる独自の領域を形成している。こうした地球惑星科学を渡邊は、「歴史構築型科学」と呼んでいる。

続く熊澤・吉田の提題は、全地球史解説という視点からの、「科学の科学」の試作品の提示である。この試作品では、できるだけ形而上学的要素を排除し、全地球史解説の成果を踏まえて、経験の蓄積再構成としての科学を~10⁹年に及ぶ地球環境と生命の共進化の生成物として論じる。この自然化した科学論では、「生き継ぎ」という従来の哲学とは無縁のことを規範にして、社会と倫理との関係までを接続するデザインになっている。この科学論の全体を概観すると、われわれの将来の生存継続に必須の「将来科学」とでも呼ぶべき領域が明示されることになる。

こうした地球惑星科学者からのコールに、科学哲学者はどのように答えるか。戸田山の提題は、自然化された人類文明史（地球史第七事件を対象とした「科学の科学」）と、将来科学の1つの形としての「絶滅プログラム」を展開するものである。特に後者は、（地球史的にみて）近い将来人類が絶滅するものだとしても、その絶滅のあり方を問うものであり、科学的な知見に基づいた上での究極的な哲学的問題となる。なぜなら、それは「人間とは何か」、「何が我々にとって最も重要なものか」、「どのような形で我々の存在を生き継ぐか」という重たいサブ問題からなる複合的問題だからである。

以上のように、本シンポジウム「地球惑星科学の哲学」において我々は、地球惑星科学（者）に内在している哲学的意識や課題を取り上げ、明確化し、科学哲学コミュニティが取り組むべき問題として提示することを試みたいと考えている。

*「新しい科学哲学をつくる会」については、<http://nove-creamus.com/> を参照されたい。

参考文献：『全地球史解説』，東京大学出版会，2002